

博物館だより



博物館休館日カレンダー
2025年 6月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	1	2	3	4	5

休館日 ※情報は R7.5.16 現在

No.223

令和7年6月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津 1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

◆ 博物館 NEWS

「昭和 一〇〇年記念」

「吉田増蔵の生涯と功績」
パネル展示実施中！

本年は「昭和100年」にあたる節目の年ですが、この元号「昭和」を考案したのは、みやこ町出身の「吉田増蔵」です。



▲マンガの場面を分かりやすくパネルで展示しています。

「昭和」は、現在「世界で最も長く続いた元号」に位置づけられています。当館では、このメモリアルイヤーを迎えるにあたり、2年前に制作した、みやこ町先人マンガ「吉田兄弟物語」に描かれた彼の生涯や功績などについて、現在、パネル展示を実施しています。

また元号「昭和」及び現在の上皇陛下（平成に即位した天皇陛下）の名前・称号が考案された過程を詳しく、分かりやすく学ぶことができますので、是非ご覧ください。



▲元号発表体験コーナー。官房長官になりきって写真撮影！

◆ 講座・教室・催し物ガイド 6月の歴史講座

【漢詩紀行講座】

6月7日（土） 9時30分～

【古文書講座】

6月14日（土） 10時～

【古典かな講座】

6月21日（土） 9時30分～

【みやこ学講座】

6月28日（土） 10時～

※見学会等は別途ご案内します。
※日程等変更となる場合があります。

文化遺産ボランティア 養成講座（第10期）参加者募集！

町の宝（文化遺産）を3つのアクション①ガイド（案内）②ガード（管理）③ワーク（調査＆学び支援）でサポートするスタッフを募集＆養成する講座です。ヤル気＆元気がある方なら町内外不問で途中からの参加もOKです。貴方も町の宝の魅力を語り発信する活動に取り組んでみませんか？

※月1回程度の活動を計画しています。申込時に詳細を案内します。
※申込先 ☎ 33-4666へ

4・5月の業務日誌から

4月29日（火）、当館の常設展示資料・金銅十一面観音懸仏が祭礼のため蔵持山神社へ一次返却されました。永年続くこの慣わしはいわば「年に一度の神（仏）様の里帰り」。祭礼終了後は無事、館に戻られました。

5月1日（木）、甲塚墓地で郡長正公155回忌法要が行われました。法要には長政自刃の舞台となった育徳館高校からも生徒代表2名が参列し、同年代の若者の死に、真摯な祈りを捧げていました。

5月3日（土）、横瀬・光富地区で豊前神楽の奉納が行われました。横瀬では「カワイイ鬼」たちによる「四方鬼」の舞が、光富では迫力ある「御先」の舞が披露され、どちらも大賑わいの一夜でした。

5月10・11日（土・日）、犀川生立で「生立八幡神社山笠」行事が行われました。昨年から始まった自衛隊員の応援が加わる中、山笠は曳山も昇山もスムーズに動座し、奉納は無事終了しました。



▲長政を悼むかのような雨も心配される天気でしたが幸いに降雨はなく、法要は無事終了しました



▲曳手も集まり動き出す準備万端の続命院区の曳山



▲蔵持山神社では氏子の歓迎の中神事が行われ、神（仏）人が揃って今年の平安を祈願していました



▲左：「四方鬼」の舞（横瀬）／右：「御先」の舞（光富）

みやこの歴史発見伝 177

博覧会と 吉田健作

大阪万博(万国博覧会)開幕

4月13日、「大阪万博」が開幕しました。「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに10月13日まで開催される、この博覧会の正式名称は、「2025年日本国際博覧会」です。国際博覧会が国内で開催されるのは2005年の「愛・地球博」以来で、大阪開催は55年ぶり2回目となります。今回の万博は、158の国や地域が参加する、史上初の「海上万博」で、1周約2kmを測る、世界最大級の本造建築物となる「大屋根リング」、「空飛ぶ車」などが開催の目玉となっています。「博覧会」とは「様々な物品を集めて展示・公開する催し」のことで、最古の「国内博覧会」は、227年前にフランスのパリで開催され、その後、各国で開催されるようになりました。第1回の「国際博覧会」は174年前にイギリスのロンドンで開催されていますが、日本の国際博覧会参加は、この16年後に開催された「第2回パリ万博」が初めてとなります。

元号「昭和」の考案者の兄
第1回の「国際博覧会」がロンドンで開催された翌年の嘉永5年(1852)、現在のみやこ町勝山上田で、吉田健作は生まれました。彼の14歳年下の弟が元号「昭和」の考案者、吉田増蔵です。健作は、漢学者の村上仙山が行橋市上稗田に開いた私塾「水哉園」に入門します。この塾で、最も親しかった学友が、後に内務大臣となる末松謙澄です。吉田健作は、明治7年(1874)に「小倉県」に勤務し、翌年2月に上京します。同年5月には内務省農務課の勤務となりますが、これ以降、大久保利通が特に力を注いだ日本の産業振興策に深く携わることになります。

大久保利通のもとで

明治維新後、日本の近代化促進を目的として開催された博覧会が、「国内勧業博覧会」です。この博覧会は、大久保利通の主導によって、国内物産の開発、産業発展、輸出品目の育成を目的として開催されました。この頃の日本には「万国博覧会」を開催する国力がなく、国内の産業増進を推進する上でも「内国」の産業を改めて見直す必要がありました。第1回の「内国勧業博覧会」は明治10年(1877)8月21日から11月30日まで開催され、8万4353点の品々が出品されています。出品物の収集にあたっては前年のフィラデルフィア万国博覧会を参考に実施され、集められた品々を鉱業及び冶金術、製造物、美術、機械、農業、園芸の6つに分類して審査が行われました。これらの収集にあたって所有者と交渉したり、博覧会運営の事務に携わったのが、みやこ町出身の吉田健作です。

博覧会の開催中には、暴風雨によって展示施設の壁が壊れるアクシデントがありましたが、健作の即時対応により、展示品は損壊を免れ、健作はその功績が称えられています。会期中は、西南戦争やコレラの流行などの影響もありましたが、45万人以上が来場し、博覧会は成功をおさめました。吉田健作が携わった「第1回内国勧業博覧会」は、その後日本で開催された博覧会運営の基礎になったといわれています。

フランスにおける製麻の技術取得

吉田健作は、産業振興策の中でも、特に麻や亜麻、綿素材を平織りして作る厚手の布地である「羽布」や「帆布」の機械化による大量生産が急務であると訴えます。この当時、軍服、背囊、テント等の装備品から、プロペラ動力戦闘機の翼に張る「羽布」まで、ほとんどの軍需品は、麻製品で構成されていました。戦争など有事の際には、このような「軍需物資」を他国から輸入することはできず、また国内の帆布生産も江戸時代以来の手工業に頼っていたため、軍隊の需要を満たすことはできませんでした。健作は、日本の気候・



パリ万博に随行した吉田健作
みやこ町先人マンガ『吉田兄弟物語』より

風土に適した亜麻の栽培から帆布製造にいたる一連の技術研究に没頭しますが限界を感じ、外国の先進地視察の要望書を内務省の上司に提出します。彼の熱意が届き、後に内閣総理大臣となる松方正義が、明治11年(1878)、当時開催されていたパリ万国博覧会を視察することになり、健作は、これに随行する形でフランスへの渡航が許可されます。この渡航船には、偶然にも別の目的で渡航する末松謙澄が同乗しており、同郷の2人は異国の地で、国の発展のために尽くすことを誓います。フランスでは、パリを舞台に1855年以降、8回の国際博覧会が開催されていますが、吉田健作が視察したのは3回目のパリ万国博覧会です。36ヶ国が参加した、この博覧会は、明治11年(1878)5月20日から11月10日までの開催会期中に1616万人が来場しました。グラハム・ベルの電話機をはじめ、みやこ町出身の岩垂邦彦が電気工学を学んだ、トーマス・エジソンの蓄音機や、自動車が出品されるなど、当時を代表する発明品が展示されていました。

パリ万国博覧会を見聞した吉田健作は、西洋と日本との国力・技術力の圧倒的な格差を目の当たりにします。現実を痛感した健作は、改めて製麻業の機械化と工場建設の急務を訴えました。そして、この当時、繊維工業の先進都市であったフランス北部の「リール市」に所在した大規模な亜麻の栽培農家に滞在することを決意します。昼間は麻の栽培技術の実地研修、夜はフランス語や最先端の機械工学など、文字通り「寝食を忘れて」製麻技術の習得に努めます。

した。その結果、フランスが200年以上の歳月をかけて構築した麻の栽培から機械を用いた帆布製造に至る一連の技術や知識をわずか3年という短期間で習得します。しかしこの時の無理がたたなり、重い喘息の持病を抱えることになりました。

製麻工場の設立

明治14年(1881)に帰国した健作は、休むことなく製麻工場建設の意見書・予算書などを農商務省に提出します。近代的な工場設立には数々の困難が伴いましたが、献身的な努力でこれを克服し、明治19年(1885)11月、現在の滋賀県大津市に日本初の近代的な製麻工場「近江製絲紡織会社」が開業しました。その後も健作の指揮により、明治23年(1890)4月には現在の栃木県に「下野麻紡織会社」、同年7月には「北海道製麻会社」が開業しました。これらの製麻工場は、大久保利通が目指した「日本の近代化」の一翼を担うことになりました。

健作の死と故郷

明治25年(1892)2月5日、健作はフランス滞在中に患った喘息の悪化により41歳の若さで亡くなります。彼は生前、農業振興策にも努め、農民の生活安定・向上のため様々な作物栽培も試みています。文字通り身を削って短期間で外国の先進技術を習得し、国の近代化に努めただけではなく、故郷の発展や農民の生活上までを視野に、産業・農業振興に取り組んだ故郷の先人の功績を永く後世まで伝えてゆきたいものです。

(井上信隆)